

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：25201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02678

研究課題名（和文）韓国語慶尚南道諸方言の語形成とアクセントに関する調査研究

研究課題名（英文）A Study of word formation and accent in the Gyeongsangnam-do dialects of Korean

研究代表者

姜 英淑（KANG, YOUNGSUK）

島根県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：80610162

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、韓国語慶尚道諸方言の語形成におけるアクセント特徴を明らかにすることを目的としている。主に、派生語、外来語、外来語関連語彙、混成語を中心に新語形成の際に働いているアクセント規則の解明を課題としている。釜山方言、密陽方言および晋州方言の実地調査を行い、方言間に見られる違いを明らかにした。密陽方言における外来語やその関連語彙、混成語に関する先行研究は皆無であり、本研究を通して他の方言と同様なアクセント規則が働いていることを明らかにした。また、晋州方言における当該語彙に関する研究は管見の限りないが、本研究を通してそのアクセント特徴を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、音韻研究の重要な課題の一つである新語形成におけるアクセント規則を解明できたことにより、その意義は大きいと考えている。韓国語慶尚道諸方言における外来語アクセントに関しては、いくつかの研究からその規則が明らかにされているが、混成語や頭文字語に関するアクセント研究は皆無に等しい。特に、慶尚道諸方言の中で最もアクセントの対立が多いとされる密陽方言の外来語のアクセントやその関連語彙、及び混成語のアクセントなど、新語形成過程におけるアクセントの特徴を記述し、その規則を解明できたことは、記述研究と同時に理論面でも重要な成果をあげたものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I would like to clarify the accent rules in word formations in dialects of Gyeongsang, South Korea. It primarily focuses on investigating the accent rules involved in the formation of neologisms, particularly in loanwords, loanword-related vocabulary, and blending words. field works were conducted on the Busan dialect, Miryang dialect, and Jinju dialect, revealing differences among the dialects. Previous studies on loanwords, initialisms, and blending words in the Miryang dialect were non-existent. However, this study revealed that the Miryang dialect has similar accent rules with two other dialects. While research on initialisms and blending words in the Jinju dialect was scant, this study successfully uncovered its accent rules.

研究分野：人文学

キーワード：語形成 混成語 アルファベット頭文字語 外来語 慶尚道方言 密陽方言 釜山方言 晋州方言



|                            |                |
|----------------------------|----------------|
| mək- (食べる) + -i (名詞派生接辞)   | mək.i (餌)      |
| [ ]                        | [ ]            |
| ③ u:r- (泣く) + -po (名詞派生接辞) | ur.po (泣き虫)    |
| [ ]                        | [ ]            |
| mək- (食べる) + -po (名詞派生接辞)  | mək.po (食いしん坊) |
| [ ]                        | [ ]            |

(例1)の②は、長母音を有する1音節の用言語基(韓国語の長母音は1音節語の単独形でしか現れないため、単独で使われることがない用言語幹の長母音は名詞形活用語尾が付いた語形で類推可能である「姜英淑 2017:42」)に母音で始まる接辞が付いたものであり、結合形全体が[ ]の音調型になる。これに対して、①の kop- (綺麗だ)は、長母音を有する1音節語基であるものの、母音始まりの接辞は語基のアクセントに順接した音調型になり、②との違いが現れる。mək- (食べる)は、長母音ではない1音節語基であり、母音始まりの接辞は語基のアクセントに順接する。③は子音で始まる接辞が付いたものであり、語基のアクセントに順接している音調型で発音される。このようなアクセント現象は、用言の活用形のアクセント特徴に似ている。特に、②のアクセント現象は、(例2)のように、用言の活用形におけるアクセント特徴と同様である。

|                              |             |
|------------------------------|-------------|
| (例2) ku:p- (焼く) + -ə (連用形語尾) | ku.wə (焼いて) |
| [ ]                          | [ ]         |
| ku:p- (焼く) + -i (名詞派生接辞)     | ku.i (焼き)   |
| [ ]                          | [ ]         |

(例2)は、長母音を有する1音節語幹(語基)に、それぞれ母音で始まる「連用形語尾」・「名詞派生接辞」が付いたものであり、結合形全体が[ ] ( )の音調型で現れており、活用と派生で同じ規則が働いていると解釈できる。

次に、2音節以上の語基では、接辞の種類に関係なく、接辞が語基のアクセントに順接している(例3)。この点も用言の活用形のアクセント規則と同様である。ちなみに、自らのアクセント持っている接尾辞は用言語基には結合しない。

|                                  |                 |
|----------------------------------|-----------------|
| (例3) hin.tir- (振る) + -i (名詞派生接辞) | hin.tir.i (振り子) |
| [ ]                              | [ ]             |
| tar.ri- (走る) + -ki (名詞派生接辞)      | tar.ri.ki (走り)  |
| [ ]                              | [ ]             |

用言以外の語基には、自らのアクセント持たない接尾辞と持っている接尾辞でアクセント現象が異なる。(例4)のように、アクセントを持っている接尾辞は末音節にアクセント核がある語基に結合した場合は、接辞のアクセント位置が活きる。それ以外は、すべての接辞が語基のアクセントに順接する。(例4)のアクセント現象は、複合名詞のアクセント規則と同様であり、用言以外の語基に有アクセントの接尾辞が付くと、複合名詞のアクセント規則が働くと捉えられる。

|                                      |                         |
|--------------------------------------|-------------------------|
| (例4) k'ot (花) + -tap.t'a (らしい)       | k'ot.t'ap.t'a (花らしい)    |
| [ ]                                  | [ ]                     |
| ka.ku (家具) + -caŋ.i (技術者を意味する接辞)     | ka.ku.caŋ.i (家具職人)      |
| [ ]                                  | [ ]                     |
| sa.raŋ (愛) + -si.rəp.t'a (~らしい、のようだ) | sa.raŋ.si.rəp.t'a (愛しい) |
| [ ]                                  | [ ]                     |

## 2) アルファベット頭文字語のアクセント特徴

釜山方言のアルファベット頭文字語(以下、ア頭文字語)のアクセントは、第1要素の音節数によって異なるアクセント特徴を見せる。具体的には、第1要素が1音節形(pi B)か多音節形(e.si S、e.i.chi H)かによってアクセントが決まり、多音節形の場合はさらに最終要素のアクセント位置が関わることが分かった。本研究では、3名の話者を対象に調査を行い、220の語彙項目のアクセントを調べた。語例は、2文字からなるものが97個(LG等)、3文字からなるものが110個(DNA等)、4文字からなるものが13個(ROTC等)である。

第1要素が1音節形のアルファベットで始まる例は、(例5)のように、音節構造や後続要素のアクセントに関係なく単位全体が[ ] ...の音調型で現れる。これに対して、第1要素が多音節形のアルファベットで始まる例は、(例6)のように、低く始まり、第2音節から高くなり最終要素のアクセント位置まで高く発音される。

|   |
|---|
| (例5) ti.em(DM)、er.ci(LG:会社名)、ar.ce.i(RJ:キャラクター名)、en.s'i.tʰi(NCT:歌手名): [ ] ( ) |
| (例6) e.ph'i.em(FM)、e.si.en.e.si(SNS)、t'ə.pir.rju.s'i(WC): [ ] ...] ( )        |

(例5)と(例6)のように、ア頭文字語は、第1要素の音節数と最終要素のアクセント位置によって異なる音調型が現れる。この特徴は、釜山方言の外来語のアクセント規則や複合名

詞のアクセント規則と関連付けられない独立した規則に基づいたものと解釈できる（一部の例外については話者を増やして調べる必要がある）。

## （2）密陽方言の語形成過程におけるアクセント

### 1）外来語のアクセント規則

密陽方言は、慶尚南道諸方言の中でもっともアクセントの型の対立が多い方言で知られており、外来語を取り入れる際にどのような規則が働くのかはまだ解明されていない。本研究では、3名の話者を対象に調査を行ったが、もっとも詳しく調査できた一人（40代）の資料を主な分析対象とした。語彙数は804語で、単独形や助詞付き形のアクセントを調べた。その結果、第1音節と語末音節の音節量が密接に関連していることが分かった。

1音節語には基本的に[ ]の音調型が現れる（一部固有語化した例を除く）。このアクセント特徴は、他の慶尚南道方言でも見受けられるものである。

（例7）kəp (cup): [ ]                      kəp.i (cupが): [ ]

2音節語には3つの音調型が現れるが、まず、語末音節が重音節(CVC)か軽音節(CV)かによって、大きく分かれる。まず、重音節の場合は、さらに第1音節が重音節か軽音節かによって異なるアクセント特徴が現れる。第1音節が重音節であれば、基本的には[ ]という音調型が現れる（例8の㉔）。この音調型で現れる例の中には、第1音節が軽音節で、かつ最終音節の頭子音が強子音(/s', k<sup>h</sup>, t<sup>h</sup>, p<sup>h</sup>, h/)である例が19個ある（例:㉔'）。強子音は、音的にその直前の音節末に同類の子音を挿入して発音する傾向がある（宗喆儀 1993:5）。このことにより、㉔'のようなアクセント特徴は、第1音節を重音節として認識した結果と解釈できる。韓国人が日本語を発音する際に、無声破裂音の前に促音を入れて発音する現象（例：来て 来って）は既に指摘されているが（関光純?）この現象は日本語に限らず、外来語の発音全般に渡って起こる可能性が考えられる。これに対して、㉔のように第1音節が軽音節の場合は、基本的に [ ]

の音調型になる（mer.ron「メロン」のような例は、語末の/r/が coda として認識されたため（Kenstowicz&Sohn）第1音節を「軽」として見做した結果だと捉えられる。ちなみに、音調型[ ]の例の中には、第1音節が/r/で終わるものはない。

（例8）㉔ hoŋ.koŋ (香港): [ ]                      hoŋ.koŋ.i (香港が): [ ]

㉔' re.s'in (レッスン): [ ]                      re.s'in.i (レッスンが): [ ]

㉔ wa.in (ワイン): [ ]                      wa.in.i (ワインが): [ ]

次に、語末音節が軽音節の場合は、基本的には[ ]の音調型で発音される。ただし、最終音節が軽音節であるにも関わらず、si.k<sup>h</sup>i (スキー)のように第1音節が「無声子音+挿入母音/i/」の例は [ ]のような音調型で発音されるが、これは、無声子音+挿入母音/i/の音節にはアクセント核が来るのを避けるため、核が1音節後ろにずれた結果だと解釈できる。

（例9）me.nju (メニュー): [ ]                      me.nju.ka (メニューが): [ ]

3音節語には4つの音調型が現れるが、第1音節が重音節か軽音節かによって大きく分かれる。重音節の場合は、基本的には[ ]の音調型が現れる。これに対して、軽音節の場合は、さらに語末音節が重音節か軽音節かによって、それぞれ [ ]、[ ]の音調型が現れる。

（例10）の㉔は [ ]で発音される例であり、㉔は [ ]で発音される例である。ただし、pa.na.na (バナナ)のように、[ ]が期待されるが [ ]で現れるものが4例ある。この点は、他の慶尚道方言と同様であり、例外として扱う。また、mi.si.t<sup>h</sup>ə (ミスター)も [ ]が期待されるが、[ ]の音調型で現れる。この例は、第2音節が無声子音+挿入母音/i/のものであり、「無声子音+挿入母音/i/」の音節にはアクセント核が置かれず、核が1音節前にずれた結果だと捉えられる。

（例10）㉔ ek.si.p<sup>h</sup>o (エキスポ) sin.ti.rom (シンドローム): [ ]

㉔ ti.ca.in (デザイン) pi.t<sup>h</sup>a.min (ビタミン): [ ]

㉔ ra.ti.o (ラジオ) ma.nil.la (マニラ): [ ]

4音節語には、4つの音調型が現れるが、3音節語と同様に、第1音節が重音節か軽音節かによって大きく分かれ、重音節であれば[ ]の音調型になる。これに対して、軽音節の場合は、さらに語末音節が重音節のものは [ ]、軽音節のものは [ ]の音調型が現れる。ただし、s'i.k<sup>h</sup>ju.ri.t<sup>h</sup>i (セキュリティ)だけは、[ ]で発音され、例外となる。

（例11）㉔ in.t<sup>h</sup>e.ri.ə (インテリア) un.tə.ra.in (アンダーライン): [ ]

㉔ pa.i.or.rin (バイオリン) t<sup>h</sup>er.re.pi.cən (テレビ): [ ]

㉔ k<sup>h</sup>i.re.p<sup>h</sup>a.si (クレパス) k<sup>h</sup>or.ro.ra.to (コロラド): [ ]

5音節語には、4つの音調型が現れるが、3音節語・4音節語と同様に、第1音節の音節量と語末音節の音節量によってそれぞれ、[ ]、[ ]、[ ]が現れる。

（例12）㉔ paŋ.kir.ra.te.si (バングラデシュ): [ ]

㉔ a.i.si.k<sup>h</sup>i.rim (アイスクリーム): [ ]

㉔ o.si.t<sup>h</sup>i.ri.a (オーストラリア): [ ]

上記の例以外に、本来は [ ]の音調型で現れるものが、「無声子音+挿入母音/i/」の音節にはアクセント核が来ないため、1音節前に核がずれて [ ]で現れたと解釈できるものが2例存在する（pi.a.ni.si.ti「ピアニスト」）。

### 2）混成語のアクセント規則

密陽方言の混成語形成におけるアクセント規則を取り上げた研究はまだない。本研究では、一人の話者を対象に、196 個の語彙を調査した。対象語彙は、新たな意味を産出する語に限定し、(例 13)の結合パターンの例のみを対象とした。考察の結果、結合形がインプットの後部要素(Y)の長さを引き継いだ場合はYのアクセントを継承し(例 14)、インプットの前部要素(X)の長さを引き継いでいる場合は、Xのアクセントを継承する(例 15)。さらに、結合形がどちらの長さも引き継がない場合は、外来語のアクセントに従うことが分かった(例 16)。

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| (例 13) X (AB)                                 | + | Y(CD)                                       | Z (AD)                                      |
| (例 14) <u>mu</u> (大根)(2)                      | + | pe. <sup>ch</sup> u (白菜)(2)                 | mu. <sup>ch</sup> u (ムチュ:新種の野菜)(2)          |
| [ ]   |   | [ ]   | [ ]   |
| ra.mjən (2)                                   | + | su. <u>ce.pi</u> (3)                        | ra.ce.pi (3)                                |
| (ラーメン)  |   | (すいとん)                                      | (ラジェビ:メニュー名)                                |
| [ ]   |   | [ ]   | [ ]   |
| a.p <sup>h</sup> a.t <sup>h</sup> i (3)       | + | o.p <sup>h</sup> i.si.t <sup>h</sup> er (4) | a.p <sup>h</sup> a.si.t <sup>h</sup> er (4) |
| (アパート)  |   | (ワンルーム)                                     | (アパートとオフィスの機能を結合した住居)                       |
| [ ]   |   | [ ]   | [ ]   |
| (例 15) <u>ko.tiŋ.ə</u> (3)                    | + | <u>kar.pi</u>                               | ko.kar.pi (3)                               |
| (サバ)  |   | (カルピ)                                       | (焼きサバ)                                      |
| [ ]   |   | [ ]   | [ ]   |
| c'a.p <sup>h</sup> a.ke.t <sup>h</sup> i (4)  | + | nə.ku.ri                                    | c'a.p <sup>h</sup> a.ku.ri (4)              |
| (インスタント麺)                                     |   | (インスタント麺)                                   | (2種類の麺を混ぜ合わせたもの)                            |
| [ ]   |   | [ ]   | [ ]   |
| (例 16) <u>e.tju.k<sup>h</sup>e.i.sjən</u> (5) | + | pe.i.pi.si.t <sup>h</sup> ə (5)             | e.tju.si.t <sup>h</sup> ə (5)               |
| (education)                                   |   | (babysitter)                                | (教育専門のベビーシッター)                              |
| [ ]   |   | [ ]   | [ ]   |

### (3) 晋州方言の語形成過程におけるアクセント

#### 1) 接尾辞による派生語のアクセント特徴

本研究では、2名の話者を調査し、380の語彙項目のアクセントを調べた。接尾辞は、釜山方言にならない、アクセントを持たないものと自らのアクセント持っているものに分けて、語基と接続した結合形のアクセントを調べた。晋州方言の接尾辞による派生語のアクセントは、語基が用言語基なのかそれ以外かで異なるアクセント特徴が現れる。用言語基の場合、一部の長母音を有する1音節の語基に母音始まりの接辞が付くと、[ ]の音調型が現れるが、それ以外の場合は基本的に接辞は語基のアクセントに順接する。このアクセント現象は、用言の活用形におけるアクセント特徴と同じであり、用言語基に接尾辞が結合する際には、用言の活用形のアクセント規則が働いているものと解釈する。用言語基以外のものと接尾辞が結合する場合には、複合名詞のアクセント規則が働く。このアクセント特徴は、釜山方言と同様であり、アクセント体系は異なるものの、接尾辞による派生語形成においては同じアクセント規則が働いていると解釈できる。

#### 2) アルファベット頭文字語のアクセント特徴

本研究では、2名の話者を対象に、260の語彙項目のアクセントを調査した。その結果、晋州方言のア頭文字語のアクセントは、第1要素の音節数によって異なるアクセント特徴を見せることが分かった。具体的には、第1要素が1音節形(ti D)か多音節形(a.i I, e.i.c<sup>h</sup>i H)かによってアクセントが決まるが、第1要素が1音節形の場合は、[ ]...の音調型が現れる。一方、多音節形の場合は、次末音節から下降する[ ]...の音調型が現れ、助詞が付くと[ ]...のように高い音調が後にずれて文節全体で次末音節型で発音される。この性質は、晋州方言のアクセントの中で文節全体で決まった音調型が被さっている語声調のものである。以上のア頭文字語のアクセント規則は、釜山方言よりシンプルだが、第1要素の音節数によって異なるアクセント特徴を見せるという共通点があり、本質的なメカニズムは同じと解釈できる。

本研究を通して、派生語を含む新語形成におけるアクセント特徴を明らかにすることができた。取り上げた各方言は異なるアクセント体系を成しているものの、語形成過程においては類似するアクセント特徴が現れていることが解明された。この結果から、規則の一般化において重要な結果が得られたと判断できる。

#### <参考文献>

- 姜英淑(2017)『韓国語慶尚道諸方言のアクセント研究』勉誠出版  
 宗喆儀(1993)「(子音の発音)」(新国語生活)、3-1: pp.3-22  
 許雄(1963)『中世国語研究』正音社

Kenstowicz, Michael and Hyang-Sook Sohn(2001) "Accentual adaptation in North Kyungsan Korean" In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale, a life in language: 239-270*. Cambridge, Mass:MIT Press

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|  |                         |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名<br>姜英淑  | 4. 巻<br>第83輯            |
| 2. 論文標題<br>韓日両言語におけるアルファベット頭文字語のアクセント研究 -釜山方言と鹿児島諸方言を中心に-            | 5. 発行年<br>2019年         |
| 3. 雑誌名<br>The Japanese Language and Literature Association of Daehan | 6. 最初と最後の頁<br>157 ~ 174 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.18631/jalali.2019..83.009             | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                               | 国際共著<br>-               |

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>姜英淑                          |
| 2. 発表標題<br>韓国語密陽方言における語形成とアクセント         |
| 3. 学会等名<br>国立国語研究所対照言語学プロジェクト音声研究班研究発表会 |
| 4. 発表年<br>2021年                         |

|                             |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名<br>姜英淑              |
| 2. 発表標題<br>晋州方言の派生語のアクセント特徴 |
| 3. 学会等名<br>韓国学研究会第31回研究発表会  |
| 4. 発表年<br>2019年             |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>姜英淑                          |
| 2. 発表標題<br>韓日両言語におけるアルファベット頭文字語のアクセント特徴 |
| 3. 学会等名<br>大韓日語日文学会（国際学会）               |
| 4. 発表年<br>2018年                         |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>姜英淑                          |
| 2. 発表標題<br>韓国語慶尚南道密陽方言における混成語形成とアクセント特徴 |
| 3. 学会等名<br>韓国学研究会第28回研究発表会              |
| 4. 発表年<br>2017年                         |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>姜英淑                                    |
| 2. 発表標題<br>韓国語密陽方言の外来語におけるアクセント性質－アクセント核と語声調を中心に－ |
| 3. 学会等名<br>第3回北海道大学音声学・音韻論ワークショップ                 |
| 4. 発表年<br>2023年                                   |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

|         |                           |                       |    |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|
| 6. 研究組織 | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

|         |         |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|